

インターネットと表現

社会改造プログラムとしての「投げ銭」

松本 功

「投げ銭」とは、何ですか？と改めて面と向かって初対面の人に聞かれると、こちらは口ごもってしまふ。相手は、何らかの具体的な答えを待っているようでもあり、あるいは取材の場合、うまいわかりやすい説明を手短かに答えてくれないだろうか期待して、私の答えを待ってくださるのだが、とりあえずの手短かな誰でも理解できる答えというものがあつかうまく伝わるだろうか、ということにどうも自信がもてないで不安になる。答えをうまく出せないで、要領を得ないことを口走ってしまふ。

だが、少しのまどろっこしい時間が過ぎた後、だんだん私も調子に乗って、話し始めているのに気が付く。たいていは、最初の不安は杞憂に終わり、それな

りの話はできた気になって終わる。それはどうしてだろうかといえは、相手の相づちを打つ感じや反応によって、取材している人聞いている人にとっての投げ銭というものがわかってきて、その人にとっての投げ銭を話し始めることができるようになっていくからだ。

これが大筋だが、わかりにくい点があるらしい。一〇〇人いたら、一〇〇人それぞれの投げ銭があるよな気がするからだ。そもそも、投げ銭には中央集権的な要素がない。言い換えるとリーダーがいて、価値を決めるということはない。自分が自分で気に入ったものに対して、支援しよう、そう思ったときにそれが具体的にできるようにしようというものを前もって決めていくものではないからだ。判断は最終的には個々人に委ねられている。こちらでは何も決める必要はない。

目次	
◆社会改造プログラムとしての「投げ銭」	松本 功
◆余りの方から割り算されて	加藤正太郎
◆ドラゴンアッシュは「親離れ」の90年代型モデルである	田中俊英
◆ヴァジラヤーナの封印について	森ひろし
◆季刊「La vue」への誘惑	山本繁樹
◆隔月刊オンラインマガジン「カルチャー・レビュー」バックナンバー	
◆編集後記	

■無断転載を禁じます■

さらさら

「さらさら」を判断した結果どのくらいの感謝に任せたいかと思っている。帽子や空き缶に自分の財布の中から、自分の裁量で、あるいは一掴みといったおどろきばな、けれども確かな手の感触がある量で、その人の芸を評価する。

このこと自体、どうなんだろう？ どう思われるだろうか？

判断も、評価もみる側に委ねられる仕組みというのは、面白いと思うだろうか。それとも、面倒なことに巻き込まれたと思うだろうか。たぶん、両方の感覚があつて当然だろう。どれがいいのか、どれがわるいのか、どれがはやっていっているのか、そうではないのか。そしてそれはどのような価値があり、経済的に評価するのどのくらい払うのが相場なのか？ 私は、相場というものを否定してはいないのだけれども、とりあえず、読む側、見る側、聞く側に判断と評価の主導権がある状態を強く肯定したいと思う。

なぜなら

生活も文化も変わったのになら、それを評価する方法が変わらないのはおかしいのではないかと単純に思うからだ。作り手は、出す内容を本心に評価できるのか？

本というものを考えてみよう。書き手＝作家の原稿を出版社の編集者が判断し、制作・営業とも相談し、どのくらい売れるかとコストを予測した上で、発行部数と定価を決めてしまう。しかも定価というのは、ベストセラーの本を基準に決められてしまふ。一般書と呼ばれる分野であれば、たいがい価格帯が決まっています。その値段で世に送り出されることになる。他国に比べて日本は本が安いから、消費者の低価格を求めるといふ要望が反映してはいないとは、必ずしも言えないかもしれない。だが、あらかじめ作り手によって、勝手に読者の数や採算点、そして値段が決められてしまふ。本心に決めることができるのか？ 本心に新しいものを書き手だけで、作り出せるのだろうか。出版人は評価できるのだろうか。

本も、買い手と書き手として出版社が相談して決めてもいいではないか。マスプロダクトの場合、それが技術的にコスト的にできなかった。本は、先に印刷されて製本されていなければならず、物理的にものを作る場合、作る数というのは最初から決めて行くしか方法がない。二〇〇部だから、〇〇円と決めて作るわけだ。もちろん、当てが外れて売れない場合は多いし、売れすぎる場合も稀にはある。

しかし、もし作る前にそういうことを決めないで作ることができる仕組み、あるいは生活を成り立たせることのできる可能性があれば、違うやり方をしてもいいのではないか。作り手ではなく、読み手が相談しながら価格を決めるやり方ができるのである。

◆ジャパニマシニスト◆

ちんぱん・おおきん・ちんぱん

No.25 (特集) **抗生物質**

使って大丈夫？ 抗生物質の正しい使い方や副作用を知りたい方へ

娘天音あまね **妻ヒロミ**

重い障害をもつ子どもと父の在り方 反響続々！ 定価二八〇円

編集代表 毛利子来 山田真 定価一〇〇〇円

山口平明

〒413-0001 静岡県熱海市泉44-20
☎ 0465-64-0887 FAX 0465-64-0889

◆仏教とジェンダー

女性と仏教東海大学ネットワーク編 性差別のない仏教社会の実現と仏教再生を目指す活躍するグループによる多角的論考 ◆1600円

◆晩節を生きる

老齡社会の渦中で、人生の晩年をいかに心豊かに生きるかを説く。 ◆1400円 汲田克夫

◆言語聴覚士の仕事 第2版

日本語療法士協会編 言語聴覚障害者の検査や訓練を行うスペシャリストの仕事の全体像を、総合的に解説する ◆1600円

宗教史地図 仏教 ◆1600円
古坂紘一 9月未刊行 ◆1600円
小滝透 イスラム教 ◆1800円
諸留能興 キリスト教

朱鷺書房
〒533-0031 東淀川区西淡路1-1-9
☎ 06 (6323) 3297 FAX 06 (6323) 3340

増刷出来 **「脳死」ドナーカード**

持つべきか 持たざるべきか

近藤誠・勝村久司他著 定価一〇〇〇円十税

運びこまれた病院であなたと家族に何が起ころう？

いのちジャーナル別冊 MOOK 第一弾

さいろ社

〒658-0072 神戸市灘区岡本7-2-10
TEL/FAX 078-453-6796
E-mail: sairo@osk2.3web.ne.jp
http://www2.osk.3web.ne.jp/~saio

VOYAGER

インターネットが縦書きで！
スイスイ読めば理解に差がでる

T-Time 2.0

Windows & Macintosh CD-ROM ◆三四〇〇円十税
ISBN4-89476-202-1

「マッキントッシュ・ハイ」の作家&ミュージシャン
山川健一ジャマイカもの単行本四冊、映像、写真を集成

ジャマイカ飛び 山川健一著
Windows & Macintosh CD-ROM ◆二八〇〇円十税
ISBN4-89476-201-3

より詳しい内容、T-Time機能限定版は
http://www.voyager.co.jp/T-Time/

ボージャー
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-41-14
tel: 03-5467-7070 fax: 03-5467-7080

ルネッサンス・パブリッシング宣言

ひらけ！ T-Time

松本 功 著 二二〇〇円十税

デジタルテキストの技法

多村・LUNA・仲 著 一三〇〇円十税

ひつじ書房

〒101-0064 千代田区猿樂町2-2-5
TEL 03-3296-0687 order@hituzi.co.jp
http://www.hituzi.co.jp/

ある人

ば、そうしてもいいのではないか。

誰もお金を払わなくなるといふだろうか。そうかもしれない。けれども読み手は、いいものであれば、それを支援する責任があるのである。というのも、きちんと作り手を育てていく気持ちがあれば、結局は面白いもの、自分にとって意味のあるものが育つていかないから。本当に自分の好きなことをやりたいのであるなら、きちんと面白がらせてくれるものを支援していかないと、後でつまらないことになる。(余談だが、日本のミュージックシーンが圧倒的に子供向きののは、大の大人がゴルフばかりして、自分たちの趣味のあったアーティストにお金を払わなかったせいではないか。ミュージシャンにお金を払うのはガキンチョばかりだから、今の状況があるのではないかと思う。)

内容を判断して積極的にコミットしていく必要は、コンテンツのデジタル化とインターネットという伝達の革命によって、極度に加速されつつある。今までは、既存の枠の中に、いろいろな楽しみはあった。本にしろ、音楽にしろ、エンターテイメントのもろもろにしろ、デジタルで作られているものではないので、コピーして誰かに手渡すということはない。あるいは言い方を換えるとパッケージというものによって、コンテンツは守られてきたということができる。

しかし、デジタルの時代はそうではない。コピーは死ぬほど容易であり、瞬時にできてしまう。おいおい実現するであろう家庭からインターネットに接続する専用線の低価格など実現すれば、電話代を気にすることもなくなる。デジタル化された様々なデータが行き交うし、コピーはさらに容易になる。コンテンツが直に、しかもコピー可能な状態で届けられるという社会は、今までは全く違つたものになるだろう。その時に、コンテンツが低レベル化するのか、そうではないのかは、非常に重要な問題だ。

投げ銭を

は、多かれ少なかれ、その人が評価をしているということである。多くの人がそんなことが可能なか、一部の人間しか、そんなことはできないのではないかと、いう人もいるだろう。それはさうだともいえるが、そうではないともいえるだろう。というのも、多くの人はちゃんと八百屋でいい野菜を買っているのではないか。野菜の鮮度や値段を見て、買う八百屋を使い分けられているのではないか。だから必要に迫られれば、できるようならないうわけがないと思うのだ。

投げ銭が不可能だという人はぜひとも代案を出して欲しい。ホームページのように誰でも見ることができて、なおかつ、なにがしかの支援の証を受け取ることのできる仕組みというものは、いまのところ、私はこれしかないと思っている。そしてそれが実現することとは、すべての人が規模の大小はあるにしても、何らかのパトロンシップを持つということになり、さらに言うとコンテンツへの関与

あるいは責任の一部を持つことになる。それが実現することは、資産家でない、ただの市民が、パトロン性を持つことになる。パトロンになるには、自分の頭で考える判断の力量が必要である。

となる

これは新しい市民革命、市民が起

こす革命でもあるのだが、それ以前に市民を作る革命だと思ふ。これは社会を改造するプログラムであり、あるいはもしかしたらウィルスかもしれない。唐突だが、社会は近代化の過程で、近代というウィルスに感染してしまった。それが、さまざまな猛毒を吐き出していると思ふ。私はそのウィルスを解毒するために、投げ銭という新しいウィルスが蔓延する必要があるのではないかと考えている。近代という思想あるいは、資本制度、学校教育、会社社会、サラリーマン主義という病に、我々は自覚することもできなくらい犯されている。その縛りのプログラムを解除すること。

フランス革命以来、近代の思想は、「自由、平等、友愛」であったはずなのに、友愛を実現するプログラムを作ることができなかった。個人はあくまで個人化するだけだ。あるいはインテリのウルトラナショナリズムやコミニズムくらいしか、作り出せなかった。もしかしたら、それをまともな意味で、実現するためのプログラムなのかもしれない。「友愛」を忘れた欠陥品の近代というOSをアップグレードするアップデーターであるといえるかもしれない。

いささか、おぼろの気配があるかもしれないが、少しでも興味をお持ちになった方は、投げ銭のホームページ (<http://www.shohyo.co.jp/nagesen/>) をご覧ください。
*
■(まつもと・いさお)一九六一年生まれ。国文学の研究書を刊行する桜楓社(現・おうふう)を経て一九九〇年に言語学の専門出版社の有限会社ひつじ書房を創立、代表となる。一九九五年に、学術専門出版社として初めて自力でホームページ (<http://www.whituzi.co.jp/>) を立ち上げる。専門書と

「投げ銭システム」の今後の展開

一九九九年十二月中旬にフリーマーケットの実験を開始する予定。決済方法はミリセントというシステムを使って、実際にお金を送ったり、受け取りする実験である。ミリセントのウォレット(電子マネー)は投げ銭のイメージに近く、クレジットカードからこのウォレットに小銭を入れたら、その後は簡単にお金を送ることができるようになる。

感覚としては小銭入れから、お金をつかんで帽子に投げ込む感じが出る。問題はマップキントッシュでは使えないこと、Javaを使ったネットワークウォレットを開発中ということだが、製品化時期は未定。

セクシュアリティ

余りの方から割り算されて

加藤秀一著『性現象論……差異とセクシュアリティの社会学』(勁草書房)を読む

加藤正太郎

その

考え方は間違っている。何故ならそんなふうにも考えても面白くないからだ、と学生の頃はよく言い放つていたものだ。差別は結局は心の問題と多くの人が言い、聞きかじりのリビドーや集団的無意識が一人歩きしていたし、世間では血液型や星座による性格分析を知らなかったり、手相を見ることのできなれば、「女の子」と話すきっかけさえつくれないらしかつた。

いつしか「本能」という言葉を毛嫌いし、何もかんでも社会の方から考えるようにしているつもりだった。人間を生育歴や環境の方から解いていき、どうしても余るものがあるとすればそれが「本能」といふべきものだろう、と。これをとりあえず自分なりに「割り

算主義」と呼んでいたように思う。だからジェンダー(社会的に編成された性別)という概念を知ったとき、その懐かしい響きをもつ指摘にある種の共感を持っていたはずだけれども、自分の性的指向に素直に忙しい僕は、この概念に沿って自分なりの思いつきを深めることもなく過ごしてきたのだと思う(フェミニズムに無いものねだりをしてはいけない)などと言いつつ、つまり「余り」をつきつめなければならぬような性的な動機が、僕にはなかったのだ。

「すべての」

動物の雄は、あちこちに精子をはらまき、できるだけ多く自分の遺伝子を残そうという本能をもっています。一方、雌は、なるべく強く優れた遺伝子の子供を産むために、相手の雄を選択します。……もし男が女性と同じように、好きか嫌いかを考えて、納得したうえで許し、受け入れるという選択性の強い性であったら、人類は滅びてい

た身振りでもならぬこの書物を、「立ちどまりと廻行の(またそのための例題の)「社会学」として読み、そこに切実な声を聞き取りながら、自らの粗雑な「割り算主義」を振り返ってみることができるとも思えない。

たかもしれません」
今もなお僕たちは、こういったたぐいの考え方に、「生活と感性の端々にまで絶えず触手を」伸ばされているのだらう。たとえば渡辺淳一の『男と』(中央公論社)一九九八年は、続けて次のように言っているのだ。

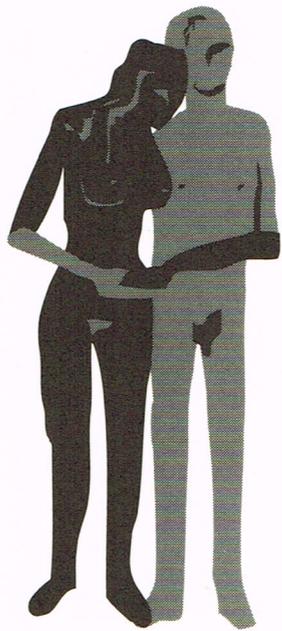
「以上の関係は精子と卵子のレベルでも顕著に現れていて、……卵子はあくまで超然と一箇所で待っています、そこに向かって何億もの精子がものすごい勢いで泳ぎ、群がっていきます。……つまり、すべての精子には、がむしゃらに卵子に向かい、その中に入りたという本能が組み込まれているわけで、同様に卵子には、無数に群がった精子のうちの一つを選択するという本能が組みこまれて

いる。……つまり、すべての精子には、がむしゃらに卵子に向かい、その中に入りたという本能が組み込まれているわけで、同様に卵子には、無数に群がった精子のうちの一つを選択するという本能が組みこまれて

いる。……つまり、すべての精子には、がむしゃらに卵子に向かい、その中に入りたという本能が組み込まれているわけで、同様に卵子には、無数に群がった精子のうちの一つを選択するという本能が組みこまれて

いる。……つまり、すべての精子には、がむしゃらに卵子に向かい、その中に入りたという本能が組み込まれているわけで、同様に卵子には、無数に群がった精子のうちの一つを選択するという本能が組みこまれて

いる。……つまり、すべての精子には、がむしゃらに卵子に向かい、その中に入りたという本能が組み込まれているわけで、同様に卵子には、無数に群がった精子のうちの一つを選択するという本能が組みこまれて



おり、これが性の原点というわけです。……このように、男性の挿入願望は、いわば雄のDNAに組みこまれた本能的なものといっ

て過言ではありません」
思わず「間違ってる」と口走りたくなるこの数行の文章も、後に見るような「生を平板化させずにはおかない」言説を生み出すのであれば、「立ちどまりの社会学」を片手に、次のように分析しておくのも意味のないことではないだろう。

つまり作家は、「男と女の性行動の違い」を根拠づけるために、(1)精子と卵子の行動(本能の違い(性の原点))、(2)精子/卵子の行動(男/女の行動)、(3)性行動は本能的、という順で展開される論理を装っているのだが、実のところ言説としては同語反復にすぎず、またそこに論理を読みとるとしたら(あるいは作家の心情としても)逆の順を追って構成されたものである。なぜなら論者の証明部分にあたる(2)の等式を成立させているのは、「何億もの(ばらまき)・群がつてがむしゃらに中に入る(挿入する)」「一箇所で(一つを)・待ち・選択する」と表現されることで切り分けられる「二種類の動き」であり、その「違い」は、論者が事前に主張したところの、社会における男女の行動の(説明すべき)「違い」そのもの(あるいはそこから導き出されたもの)であるのだから。

単純化して言えば渡辺は、何かを証明するかのように見せながら、その実、「精子の一つ『のような男』『一つの卵子』のような女』という比喩を書いているにすぎないのであり(「一箇所の」箇あたりが実に「文学的」と言えるだろう)、したがってさらに「例題の社会学」をお手本に、一人の女性と多数の男性との性交渉を当然の風習とする社会を想定してみるならば、次のように書く作家の姿を

思い浮かべることができるのである。「多くの男性と性交したいという女性の願望は、本能的なものといっても過言ではありません。雌は、なるべく強く優れた遺伝子の子供を産むために、相手の雄を選択します。この関係は精子と卵子のレベルでも顕著に現れていて、卵子には何億もの精子を惹きつけるという本能が組み込まれているのです」

つまり「根拠」の説明に、社会における男女の「違い」と彼が信じているもの(を)を持ちこむ作家は、その「文学的」表現をもってすれば、どんな現状でも説明(肯定)できてしまうのだ。

こうして

現象論の加藤秀一ならば、「性別分割」(生殖機能を条件として人類が二つの「性別」をもつ)と「性差表象」(男女間の差異と思われているもの)の水準が混同されると、「違」うものは違「うんだ」というトートロジカルな言説空間が成立し、性差観念(と性役割観念)が強固に反復される、と述べるだろう。

そしてやはり同語反復的な性役割観念「育児は女の天分だ」について加藤の示す例を簡略化していえば、事実命題「子供を産むのは女である」「性別分割」が「だから」を介して(正当化したい)性役割規範命題「女が育児をするべきだ」に接続され(男が育児をするべきだ)にも接続可能であるにもかかわらず、「しかも」だから「の作用の痕跡が抹消されること」によって、「女が育児をするべきなのは、それが女だからだ」というトートロジックが成立しているのである。そしてこのとき、「性差の『表象』という性格が見失われ、端的に事実視される」のであって、先の接続のみを自然なものとして流通させる社会的力こそが解き明されなければならぬだろう。(第3章ジェンダーとセクシュアリティ)

したがって「性現象」へと分け入る者は、先の作家のように「男女の違いは何か」と問うのではなく(それは「性」の水準を混同し、表象の

事実視から始めることにつながるのだから)、セックス(生物学的性別)/ジェンダー(社会的性別)という切断をもって「性差とは何か」とまず問わなければならないし、より正確には「性差とは何か」とは何かと問うべきなのかもしれないのである。(第1章へ性的差異の現象学)

そもそも

男がなぜ風俗の店に行くのか……それに対する男たちの答えはただひとつ、「男だから」としか答えようがないように思います」とまさに「トートロジック」を書く渡辺淳一は、さらにこう書きつけるのであつた。

「もちろん人間の場合は、さまざまな社会的制約や抑圧によって、必ずしも動物と同じような行動をとるわけではありませんが、……欲望が高ぶっている男たちにとっては、放出することが切実な問題なのです。これをもちとさらに抑えたら、ストーカーや痴漢となり、さらには幼児誘拐のような屈折した行動に発展しないとも限りません」

こういった言説をこそ、「どこまでも生を平板化させずにはおかない暴力」というのであろう。それにしてもこの作家にとつては、「性」に及ぼす社会や環境の影響は、本能への制約や抑圧でしかないらしく、まるでジェンダーはおろか「後天的」という概念すらこの世には存在しないかのようなのである。

しかしこうした光景を前にする「週行」の社会学者なら、さらに次のように問いかけるであろう。つまり、ジェンダーという概念が、既存の「性現象」を改革可能な社会的産物ととらえることを可能にしたと同時に、対立概念としてのセックスを(たとえ余りのごく小さなものとも見つもの)にせよ、社会や歴史の外部に置くことに与し、「本質としての性なるもの」を産み出しているのだとしたら、と。

だとしたら先の作家も、ジェンダー概念からのいわば恩恵に(それとは知らずに)浴しているのだから、だからこそ、動物的な性/社会的制約という二項対立を当然のごとくに前提し、前者が後者を破壊するという筋書きの物語を書きつづけることができるのかも

しれないのである。

したがってジェンダー概念は、次のようにとらえ返されなければならない。すなわち、「ある事柄をセックスとして名指す、医学、解剖学、生理学、遺伝子学等々もまた、徹頭徹尾人間によって、社会と歴史の内部で行われる知の営み」であるならば、セックスとジェンダーは「まるごと社会的・歴史的に構築される」といふべきであり、「性別」はセックスとジェンダーとから成るに先だつて、つねに先ず、(ヘ)ジェンダーと書かれねばならない。(第4章ジェンダーの困難)

こうして

拡張されたヘジェンダー概念は、

「本質としての性なるもの」がさまざまな知見をとまなうことで既存の価値観を反復させようとするとき、「性差とは何か」とは何か」という問いとなつて、その力線からめとられないための新たな「切断」をもたらすだろう。しかし、この拡張されたヘジェンダー概念、より一般化して言えば構築主義的観点の貫徹していくその地平においてこそ、この書物の真価は問われている。

なぜなら一切を社会的産物にとらえる批判者は、いかにその立場を確保しようのか、という難問(批判者自身もその批判すべき社会によって構築されているはずなのだから)にさらされるのであり(たとえ「ミスコン」批判は、既存の「美」によつては何ら汚染されていない無垢な主体のみが、その資格をもつのか)、また、その困難に無自覚な構築主義は、本質主義を断罪する振る舞いにおいて、「被抑圧者が抵抗の礎として掴み取る『アイデンティティ』」さえ、容易に転覆できる錯誤(本質)として回収しかねないのだから(実際に構築主義は、同性愛者の性的アイデンティティを可変的なものとして矯正しようとする道ささえ抱いたのだという)。

「本質」としてのセックスの専制に退行するのは間違いだが、思考の中から「本質」というカテゴリーが払拭できるかのように振る舞うことも誤りだ」と著者が書くとき、ヘジェンダーのさらなる拡張への一歩が踏み出されていると言えるだろう。著者が解放への戦

略として掴み取るうとしていっているのは、つねに再来する「二項対立的な偽りの問題」(自然/社会、本質主義/構築主義)への本質的批判であり、またそれは、「それなしには私たちが一瞬一瞬を生きていくことができないもの」にどこまでも巻き込まれながら、そのただ中で、その危険性を認識し絶えず問い直していくような態度としての、「批判」であるのだから。したがってその可能性をめぐる論者は、「私」の所有物であると同時に「私」そのものである身体「ひとりの女」であると同時に「女たち」の一人であるということ、といった問題を、つねに「それが初めてであるかのように」たどつていかざるを得ないだろう。

フェミニズムがもはや必要とされない(未来へとヘ)ジェンダーを格闘させようとするこの一冊の社会学は、稚拙な「割り算主義」をも少しばかりは更新してくれるのかもしれない。つまり「余り」とは、社会からの割り算の果てに得られるようなものではなく、もちろん最初からあるものでもなく、また演算者こそが割り算されるのだとしたら、それが「間違っている」という直観の「根拠」であるのかもしれないのだから。(「カルチャ・レヴュー」105号掲載文を改稿)★

【かとう・しょうたろう(高校教員。友人たちと「性の研究会」会報「ばらばら」を発行。「教育塔」を考える会)会員。】

『教育の「靖国』』 教育史の空白・教育塔

教育塔を考える会編

小B6判・上製・三三八頁・定価一八〇〇円(税別)

大阪城公園大手前広場にそびえ立つ高さ30メートルの巨大な塔、壁面には教育勅語奉読の場面が描かれている。この教育塔は日中戦争の前年、一九三六年に「教育の靖国神社」として建立され、教育勅語発布記念日である10月30日に開催される教育祭は、植民地において殺された教師や「御真影」を守るために「殉職」したとされる教師を「英霊」として讃えてきた。

そして現在、一九九九年も同じ10月30日に、同じ教育塔の前で、第六四回(一)教育祭が、日教組によって開催されているのである。

本書は、教育塔のもつ歴史を豊富な資料とともに辿り、問題提起を図る。

「殉職」の実像を解き明かす歴史学者の岩本努氏、戦後の「慰霊」を問いつける田中伸尚氏の論文を収録。

ドラゴンアッシュは「親離れ」の90年代型モデルである

田中俊英

ドラゴンアッシュは少し前まではカルトなロック／ヒップホップバンドだったが、「グレイトフルデイズ」というシングルや「Viva, La Revolution」という3枚目のアルバムがかなり売れた結果、90年代最後の時代を象徴するバンドとなったと言っている。

彼らの

は、ミディアムテンポのラップナンバーで「グレイトフル」をはじめ「陽はまたのほりくりかえす」「アンダーエイジズソング」「レットユアセルフゴー、レットマイセルフゴー」など、いずれも、はじめ小さく囁くような声でラップし、サビの部分で鼻歌のようなメロディを口ずさむ、という構成をとっている。今までのヒップホップがたたくに守ってきた「メロディーへの反感」などなかったかのように、内から自然に湧き出たものとして「言葉とメロディーとリズム」の混合形を奏でる。これが実にかっこいい。また、純粋ヒップホップや、英詞で歌うパンクやハードロックもいい。僕の周囲の、30を過ぎた洋楽ファンも結構支持している。

しかし、ドラゴンアッシュの最大の特徴は、そのかっこいいサウンドではなくて、ボーカル降谷建志が書く歌詞にある。最先端のサウンドと反比例するように、その歌詞から導かれる世界は驚くほど「道徳的」なのだ。たとえば上記代表曲にこんな詞がある。「父から得た揺るぎない誇り 母がくれた大きな愛のわり」(「グレイトフルデイズ」) 「父への尊敬母への敬意 あやまちを繰り返さないための努力」(「陽はまたのほりくりかえす」)

どうだろう。そもそもロックやヒップホップは、「社会」とか「大人」という概念に反発して育ってきたジャンルで、演歌やフランク・シナトラじゃあるまいし、このような「親への

の敬愛」などという陳腐な道徳性は、唾棄すべき、というより「それがあってはロックやヒップホップと呼べない」ものだった。つまり親子愛は、ロック／ヒップホップにとって重要な敵対道徳概念なのだ。

だから、ドラゴンアッシュが売れたことで僕が抱いた驚きは、言葉とメロディーとリズムの融合よりも、むしろこの「親への敬愛」という道徳性を前面に出した詞が若者に受けているという点にあった(その他「共闘すること」「部屋から飛び出すこと」などのメッセージも受けているが、これは90年代の日本のポップ・ミュージックに共通するものだからここでは触れない)。

もともと、ドラゴンアッシュが売れたのはこの歌詞のためだけではないと思う。サウンドはかっこいいと最初に書いたが、ポップ・ミュージックでもうひとつ重要なポイントであるルックスやファッション性も、彼らは十分満たしている。サードアルバムが出た頃、降谷は、ロック雑誌のみならず若者向けファッション誌(特にストリート系)で頻繁に表紙にとりあげられていた。東京ボーイ・ミーツ・ヒップホップ文化+60年代ロック+ヨーロッパモードとも形容しきれないその「見た目のかっこよさ」も、メジャーブレイクには重要な要素だ。

新鮮だったのは、音とファッションの「かっこよさ」と、歌詞が直接訴えかけてくる古くさい「道徳性」のアンバランスだった。あのルックスと最先端のリズムを背景にして流

れてくる言葉が、道徳性の極みである「親への敬愛」。この mismatches がリスナーに衝撃的だったのは間違いない(僕はかなり驚いた)。メロディーのキャッチーさや広告戦略の巧みさなどもあるのだろうが、このふたつのアンバランスのおもしろさ・新鮮さ・奇妙さが、ドラゴンアッシュ大ブレイクの土台を支える共通感覚ではないか。

さて

僕は、ポップ・ミュージックとして社会に受け入れられたものは、現代を何らかのかたちで象徴するという前提に立つ。ドラゴンアッシュの場合、ヒットの直接の原因は上に書いたとおりかもしれないが、その歌詞の特徴である道徳性(親への敬愛)をもう少し考えることは、90年代の若者や親子関係を考えるうえで意味があると思う。

僕は、これを単なる「若者の道徳性への回帰」として片づけられない。もちろん僕も最初に聞いた時、この歌詞に反感を感じた(ロックファンなら当然だろう)。たとえロックファンならずとも、なにがしかの保守性をそこに感じとって嫌悪感を抱いたり苦笑しても不思議ではない。

また、元々は降谷個人の内面から湧き出た言葉であったのに、それが一般性を持った「親への敬愛」という新しい布につくりかえられ、我々の皮膚の上をまたひとつ覆っている(道徳はこうして我々をとりこんでいく)。こうして、知らぬ間に道徳によってがんにがらめにされるかもしれない畏れから、「ポップ・ミュージック」という巧妙な意匠をまとった「この道徳性に反発することもある。けれども、僕はこのドラゴンアッシュの道徳性を考えだしてから3カ月がたつのだが(その間、この道徳性に対して否定的原稿も他に書いた)、何かそれだけですすますことに違和

感を抱き始めたのだ。

その違和感とは、「親への

淡々とラップする降谷建志に対するリスナーの見方は、「道徳性を訴える教師」として捉えているのではなく、もう少し憧れめいた、それこそ「敬愛」や「尊敬」といった思考/感情を含む面があるのではないか、という思いだ。言い換えると、降谷の個人的「親への敬愛」その「敬愛」を表現する態度が、多くの人たちから一つの「モデル」として位置づけられているのでは、という捉え方だ。

実はそう考え始めたきっかけは、僕自身の仕事を通してだった。僕の仕事は、不登校とかわゆる「ひきこもり」(社会生活に困難を感じる20才代の青年たち)の援助活動で、家庭訪問をしたり、グループ・カウンセリング的な会を主宰したり、親の相談を聞いたりしている。そういった自分自身の体験や、同業の人たちの話を総合すると、主に「ひきこもり」と言われる人たちの多くが、親に対して過剰なほどの憎しみとその裏返しとしての愛を感じている。親について語る彼らの決まり文句は「おまえたちの育て方が悪かったから私はこうなった」というものだ。そして、その言葉と逆行するように、親が死ぬこと病気になることを極端におそれている。恨んでいるわりにはいなくなったら困る存在なのだ。もちろん、親がいなくなると自分たちが食べられないから、というのが大きき理由だろうが、それだけではない、もっと深く粘り気のある「究極の人間関係」といってもいいほどの愛憎関係を僕はそこに感じる(憎しみほどに派手なものでなくとも、深くてゆっくりに流れるような「静かな情念」的な関係もある)。

ある人は

「ひきこもり」はアメリカではたぶん存在できずホームレスになるのでは、と表現していたが、その比較の正誤は別にして、ここに見られる親子の結びつき(親離れの困難)は並大抵のものではない。しかし、「ひきこもり」に見られる親離れの困難さは、それほど異常なことだろうか。たしかに、現代社会の価値観においては、20才

「援助の現在形」を見つめて…。

—不登校・「ひきこもり」についての訪問支援、講座、当事者サークル。

くわしくは下記へ
ドーナツトーク社
 〒563-0047 池田市市町 6-23-104
 tel/fax (0727) 54-1009
 http://member.nifty.ne.jp/donutstalk/

を過ぎ、全面的に親に養ってもらう生き方はマイナーな生き方であることに違いない。だが「親離れの困難さ」という点で見ると(経済的にも精神的にも)、量に違いはあるかもしれないが、質的には他の「普通の若者」とあまり変わらないと僕は思う。ホームレスにならずに「ひきこもり」を生み出してしまいうちは、何も「ひきこもり」家庭のみが持つというものではなく、日本社会全体が持つものではないか、ということだ。言い換えると、親離れが困難な社会の典型として「ひきこもり」は存在し、それを生み出す土壌が日本社会の中に共通感覚としてある。

また、従来あった親離れは、大人社会の否定から始まり(ここがロックの始まりだろう)、長い時間をかけてその自分が否定した大人社会に同化していくというかたちで行われた。

しかし、そのスタイルがいつの間にか変形している。大人社会を否定しながらも同時に大人社会の恩恵を浴びて育っていく、一方で反抗しながら、一方では「おいしいこと(どりの思春期・青年期を送ることが珍しくなくなった(たとえば、一人暮らしをせず、親と暮らす家の中で自分の部屋を独立化するなど)。こういうスタイルにおける親離れというものは、親の完全否定というかたちで起るのではなく、親のある程度一個の別人格として認めながら、静かに巣立っていくというものではないか。その際、親の価値観に沿っ



宗教と思想

ヴァジラヤーナの封印と「オウム」

——もしくは、宗教の言葉をめぐる疎隔

森ひろし

た巢立ち方ではなく、思想やファッションや嗜好においても子ども独自の道を示しながら、である。

はなないだらうか。それを降谷の持つ自信満々の表情、すぐれたファッションセンス、稚拙だが独自の言葉で作り出す思想などが後押しする。それらは実はリスナーに向かわずに親に向かっている。リスナーは、こうして「親離れ」していく降谷に、何となく憧れを抱いた結果の大ブレイクだったのではないか。

（たなか・としひで）一九六四年生まれ。大学卒業後、一九九二年頃より、友人と設立した出版社（さいる社）勤務のかたわら「相談家庭教師」という名称で不登校の子への訪問活動を始める。一九九六年、個人事務所「ドーナツトーク社」を設立。訪問・相談活動の他、講座運営などを行なう。また月刊誌「KID」対話することでも子どもへの援助が見えてくる。「ウェブ版」週刊「ドーナツトーク」http://member.nifty.ne.jp/donutstalkを発行。E-mail: zan01701@nifty.ne.jp

オウム

真理解が「復活」したとの報道がかまびすしい。難

反した元信者の約七割が復帰し、経営するパソコンショップで七十億円もの粗利を稼ぎ、全国各地に新たな拠点進出を図って住民とのトラブルが絶えないという。破防法適用を見送ったツケが回ってきたのだ、と一部論者の鼻息は荒い。だが現象形態はともかく、破防法を適用したところで事態の本質は変わらなかつたかもしれない。

と思うのは、そもそも脱会した信者と言

もの、これだけの人が深甚なる回心を経て教団を離れたのか定かでない、偽装転向とは言わないまでも、離れるにしろ戻るにしろ、信者たちがさして大きなハードルを越えるような葛藤を経たとはかぎらないからだ。あ

この四年間、引き起こされた事件に見合うだけの深みを伴った精神的な格闘が信者や元信者たちによって行われ、現実の社会と交錯したのだろうか。私が知りたいのはその一点であり、現状に問題ありとすれば、それは、信者たちも社会の側も思想的な格闘や魂をぶつけ合うような交通を欠いたまま、流れが淀むに任せたことだったのでないか（私として例外ではない）。そんな営為が皆無ではなかつたにせよ（註1）、メディアによって大々的にとりあげられた回心劇にかぎって、裁判の量刑上の見せしめに資するのみだった、という印象が拭えない。

オウム教団の広報副部長らが出演し「教団はこれだけ変わりました、住民の皆さんに迷惑はかけません」と力説していた。それ（周辺住民への公約）を一枚のボードに箇条書きで示した中に「ヴァジラヤーナの教えを封印する」との一箇条があった。はて「封印」とはいったい何事だろう、どう理解すればよいのだろう、というのがそのときの疑念だったが、番組では誰もこれを追及せず、不問に付されたまま終わった。

オウム教の教義である。麻原教祖は迫りくる「国家の弾圧」を回避する目的で弟子たちにサリン撒布を命じ、それをヴァジラヤーナの教えの実践、すなわち宗教上の善業だと言い合めた。係争中ゆえそこまで断定できないとしても、ヴァジラヤーナの教えが教団内に流布され、ヨーガの修行集団が武装集団まがいの宗派に変貌したテコとなったことは想像に難くない。

「実相般若経」とは「理趣経」の異本であり、さきに引用した経文とは多少のヴァリアントがあるが、円蔵が空海に真つ向から放つている問いはまさしく例の一文に関するものだ。それにしても「仏の賊」とは、いかにも厳しいクギの刺し方である。

オウム「復活」現象を深刻な社会問題と捉え、いかなる法的制度的な規制をもってこれを封じ込めるかという発想は、四年前の事件当時の議論にもまして私には迂遠な回路だとしか映らない。お前は反・社会思想の持ち主だから、と言われれば「然り」と応えるしかないのだが（ただし反社会・思想ではない）。

私は、事件に関与しなかつた信者といえ

た場面があつたことを書き留めておきたい。

「大日如来の功徳は善悪」という相対的な世俗の倫理をはるかに超越する」と強調するに直截すぎたため、うまく漢訳することができず「タトエ」という仮定表現が採用されたのではないかと指摘している（註3）。

空海の解釈によれば、「三界ノ一切有情ヲ害ス」とは一切有情の輪廻の原因である三毒を「害ス」のであって、一切有情そのものを殺害する意ではないという。この解釈が原典に照らして適正かどうか、仏教の知識に昏い私には判らない。中国経由の仏典の価値を認めないオウム教団なら、空海の解釈そのものに否定的であろう。しかし確かなことは、平安朝初期の日本密教の創成期に、くだんの一文を単なる比喩的表現として済ますことを憚って、切迫した問答が交わされていたということである。

これだけの感想を記したうえで、過日観たテレビに気になつ

た場面があつたことを書き留めておきたい。

「国家の弾圧」を回避する目的で弟子たちにサリン撒布を命じ、それをヴァジラヤーナの教えの実践、すなわち宗教上の善業だと言い合めた。係争中ゆえそこまで断定できないとしても、ヴァジラヤーナの教えが教団内に流布され、ヨーガの修行集団が武装集団まがいの宗派に変貌したテコとなったことは想像に難くない。

「大日如来の功徳は善悪」という相対的な世俗の倫理をはるかに超越する」と強調するに直截すぎたため、うまく漢訳することができず「タトエ」という仮定表現が採用されたのではないかと指摘している（註3）。

空海の解釈によれば、「三界ノ一切有情ヲ害ス」とは一切有情の輪廻の原因である三毒を「害ス」のであって、一切有情そのものを殺害する意ではないという。この解釈が原典に照らして適正かどうか、仏教の知識に昏い私には判らない。中国経由の仏典の価値を認めないオウム教団なら、空海の解釈そのものに否定的であろう。しかし確かなことは、平安朝初期の日本密教の創成期に、くだんの一文を単なる比喩的表現として済ますことを憚って、切迫した問答が交わされていたということである。

金剛手若有聞此理趣受持誦誦設害三界一切有情不墮惡趣為調伏故疾証無上正等菩提（金剛手曰、モシコノ理趣（真理の智慧）ヲ聞クコト有リテ、受持シ誦誦スレバ、タトエ三界ノ一切有情ヲ害ストモ（輪廻するすべての生きとし生けるものを殺害しても）悪趣ニ墮セズ（悪業の結果行く世界に落ちることはない）、調伏ヲモツテノ故ニ疾ク無上正等菩提ヲ証スベシ）

（一切衆生を殺害しても地獄に落ちない。それは心を調伏する戒律を受けたがゆえにである、とはどういうことですか）

この漢訳経典は、俗に「理趣経」または「般若理趣経」と呼ばれ、今日でも真言宗の根本経典である。不空アモガヴァジラ）の訳だけでなく、多くの異本が存在する。仏教に詳しい方は周知のとおり、「理趣経」は男女和合の恍惚境を菩薩の境地と説くため、セックスを大胆に肯定する経典だと曲解され、淫祠邪教と言われた真言立川流を派生させる根拠ともなった。

三界とは三毒（貪・瞋・癡）——むさぼり・いかり・おろかしさの三つの心のことである。一切衆生の現世における苦は三毒に起因する。修行者は戒律によって三毒を断ち、輪廻をまぬがれる。ゆえに悪道に墮することがないという意であつて、これこそ如来の密意である。もし言葉のとおり衆生を殺害してよいとする者があれば、それは仏の賊であることを知るべきである（「実相般若経答釈」註4）

「大日如来の功徳は善悪」という相対的な世俗の倫理をはるかに超越する」と強調するに直截すぎたため、うまく漢訳することができず「タトエ」という仮定表現が採用されたのではないかと指摘している（註3）。

「実相般若経」とは「理趣経」の異本であり、さきに引用した経文とは多少のヴァリアントがあるが、円蔵が空海に真つ向から放つている問いはまさしく例の一文に関するものだ。それにしても「仏の賊」とは、いかにも厳しいクギの刺し方である。

「大日如来の功徳は善悪」という相対的な世俗の倫理をはるかに超越する」と強調するに直截すぎたため、うまく漢訳することができず「タトエ」という仮定表現が採用されたのではないかと指摘している（註3）。

空海の解釈によれば、「三界ノ一切有情ヲ害ス」とは一切有情の輪廻の原因である三毒を「害ス」のであって、一切有情そのものを殺害する意ではないという。この解釈が原典に照らして適正かどうか、仏教の知識に昏い私には判らない。中国経由の仏典の価値を認めないオウム教団なら、空海の解釈そのものに否定的であろう。しかし確かなことは、平安朝初期の日本密教の創成期に、くだんの一文を単なる比喩的表現として済ますことを憚って、切迫した問答が交わされていたということである。

すなわち

「大日如来の功徳は善悪」という相対的な世俗の倫理をはるかに超越する」と強調するに直截すぎたため、うまく漢訳することができず「タトエ」という仮定表現が採用されたのではないかと指摘している（註3）。

「大日如来の功徳は善悪」という相対的な世俗の倫理をはるかに超越する」と強調するに直截すぎたため、うまく漢訳することができず「タトエ」という仮定表現が採用されたのではないかと指摘している（註3）。

空海の解釈によれば、「三界ノ一切有情ヲ害ス」とは一切有情の輪廻の原因である三毒を「害ス」のであって、一切有情そのものを殺害する意ではないという。この解釈が原典に照らして適正かどうか、仏教の知識に昏い私には判らない。中国経由の仏典の価値を認めないオウム教団なら、空海の解釈そのものに否定的であろう。しかし確かなことは、平安朝初期の日本密教の創成期に、くだんの一文を単なる比喩的表現として済ますことを憚って、切迫した問答が交わされていたということである。

「大日如来の功徳は善悪」という相対的な世俗の倫理をはるかに超越する」と強調するに直截すぎたため、うまく漢訳することができず「タトエ」という仮定表現が採用されたのではないかと指摘している（註3）。

空海の解釈によれば、「三界ノ一切有情ヲ害ス」とは一切有情の輪廻の原因である三毒を「害ス」のであって、一切有情そのものを殺害する意ではないという。この解釈が原典に照らして適正かどうか、仏教の知識に昏い私には判らない。中国経由の仏典の価値を認めないオウム教団なら、空海の解釈そのものに否定的であろう。しかし確かなことは、平安朝初期の日本密教の創成期に、くだんの一文を単なる比喩的表現として済ますことを憚って、切迫した問答が交わされていたということである。

■創刊の言葉■

思想・文化状況の〈現在形〉を射抜く批判的視座を求めて

季刊「La Vue」への誘惑

—オンラインマガジンとオフラインマガジンの共振を目指して—

発行人・山本繁樹

この起りこは、表現を通して「他者」との交差、あるいは「視座」の交換（相互性）をめざす媒体を模索していたことから始まっている。その基底には、思想・文化状況の〈現在形〉を射抜く批判的視座の発芽に関与できれば、というホット／クールな想いからでもあった。

それで当初は、「ラディックス（根源的批判）からルナティックス（遊星的発想）まで、思想・文化状況を〈展望〉する！」という壮大なコンセプトを用意していたのだが、まずは身近なところからと、友人・知人に原稿依頼をしながらポチポチと開始したのが、昨年の10月のことだった。

その際選んだ媒体形態は、ウェブ上でのメールマガジン（以下「メルマガ」と略す）である。時に、ウィンドウズ・マシンを購入して22ヶ月目のことであった。そして創刊されたのが、『カルチャー・レビュー』なのである。その辺の事情は、「房主の開口一番」（『カルチャー・レビュー』01号掲載）に記したので、ウェブ読んでいただくと嬉しい。

その創刊から一年後、さらなる展開としてオンライン版「カルチャー・レビュー」と連携・連動（リンク）する形式で、オフライン版（紙版）『La Vue』の創刊を企図したという次第である。

パソコンで電話さえあれば、誰でももお手軽に発信できるインターネット上での表現活動は、表現者の敷居を低くしたことは確かだ。巷には一万誌以上のメルマガが空間を行き交っているそうである。だが情報系、趣味系あるいは自分史系のメルマガが圧倒的多数の中で、本誌のような評論系メルマガはまだ少数だろう。少数でしか成立しない本誌のような評論誌こそ、発行形態としては印刷物ではなくむしろメルマガに向いているのかも知れない。発行スピード、更新の素早さを考慮に入ると、今後、学術誌などはこの方向に転進するかも知れない。

だがこのメルマガを購読できる人々は、とうぜん電脳コミュニティの人々に限られている。ならばそのコミュニティへの誘惑（入り口）としても、オフラインでの媒体形態も必要であろうと考えたのである。また紙面の読みやすさと読解の定着力においては、現時点では遙かにオフ版に優位性があると思う。それに加えて、実在感の手触りには執着するものがある。

この両誌・紙の長所を生かして、オンとオフがいわばスイッチのように切り替わるのではなく、共振し合う媒体に発展することを願い、2000年に向けて『La Vue』の出帆（出版）とする。

■なお本紙は、持ち出しが大半で営利を生み出すいわゆる「商業紙」ではありませんが、また同人紙でもありません。読者の方の評価と「投げ銭」というスポンサーシップによって、運営をめざすスタイルを模索します。頒価50円というのは「投げ銭」の目安ですので、あくまで金額は読者の方が評価してください。（但し、本紙が書店で販売されている場合は、その限りならず）また、同紙への広告協賛あるいはパトロントしてのまとめ買いのお願いと、一緒に愉しんでお手伝いいただける方を募っております。

宗教は

時として、大地に立つ私人殺してんや、しからば往生は一定すべし」と唯唯を問いつめた親鸞の言葉、「地上に平和をもたらすために私が来たと思おうな、平和ではなく剣を投げ込むために来たのだ」と十二弟子を諭したイエスの言葉を想起するまでもない。それらの言葉は、私をいったん躰かせ、宙に吊り下げる。だが、その異和の山門をひとたび潜らしめてこそ、宗教の言葉は

オウム真理教が今日、住民感情を慰撫せんがごとく口にする封印という言葉……。これを聞いたとき、私は思わず「それはないだろう」と心で呟いていた。封印がいつの日か解かれるのではないかと、その不安からではない。そこに「判断保留」という以上のニュアンスを聞きとることができないからだ。かつて自らを呪縛したヴァジラヤーナの教えとは何であったのか。教義を重んじる教団を自認する以上、それを切開せずには済ますことはできないはずだ。必要なのは「封印」ではなく、容易に語り得ないことをあえて語る言葉の（開封）ではないか。それによつてこそ、メディアや住民に対する媚態ではない、交通のための前提が築かれるのではないだろうか。

俗人にさえ超越の契機を与える秘蹟たり得てきた。ひるがえつてオウム信徒たちもまた、宗教の言葉によって穿たれた深淵を覗き見る瞬間を経たのだろうか。彼らは教義や教祖の言葉にどのように応接してきたのだろう。想像を逞しくするならば、「科学オタク」と言われた教団エリートたちには、世俗の倫理さえ相対化するがごとく原始仏典も、ただちに実現可能な教義と映つたかもしれない。ハイテク技術を縦横に駆使しさえすれば、教義の（へん）は（へん）でなくなり、そこに導師の予言成就を夢想し得たのかもしれない。けれどもそれは、自動ドアを抵抗もなく跨ぐあのコンビニ感覚無感覚に等しかったのではなかったか。

贅言すれば、私の想いはあまりに（言葉）に憑かれすぎた世代の繰り言にすぎないのではないか。どの自省が胸に萌さないではない。私は彼らを買ひ取りすぎていただけかもしれない。シャクティパットやイニシエーションの身体感覚だけが、今日なお唯一疑い得ない彼らのリアルだとするならば……。一九九九年七月十五日脱稿（『カルチャー・レビュー』06号より転載）

（註1）私の目に留まったものとしては、西脇慧「なぜ、「オウム」だったのか」評論誌「樹が陣営」18号所収、未完）のような元信者による注目すべき論考がある。

（註2）「大正新脩大藏經」第八巻所収
（註3）松長有慶著「理趣経」（中公文庫所収）
（註4）勝又俊教編修「弘法大師著作全集」第二巻所収（意訳は引用者）

【付記】

一判事・弁護士にして仏教学者・故玉城康四郎の門下生でもあった中島尚志氏私に「これまで私の著作からいささかの恩恵を蒙ってきた」に「サリン」（一九九九年七月、黙出版）という近著がある。ここで中島氏は、チベット密教（チベットに伝わったインド後期密教）と麻原の教義に根本的な矛盾がないことを述べている。たとえば「秘密集会タंत्रラ」や「最勝楽出現タंत्रラ」などの經典の記述を読めば、それは明らかだといふ。また、インド後期密教に影響を与えたヒンドウ教の代表的聖典「シヴァ・サンヒター」では「真の信りを得て、それを実修しつづける者は……たとい……（人間を含む）一切の生き物を殺すとも、罪によつて汚れることはない」とされている。これらを虚心に読むかぎり、原典へ溯れば濁るほど（へん）と言われているものは（へん）でなかったと感じられなくもない。インド・チベット・中国を経て日本に至る密教の伝来ルートは、付法と翻訳をとおして、この異怖すべき教義を巧みに緩衝する装置として機能したのだから。あるいは、強引な（へん）解釈によつて最後の（封印）をした人物こそ空海だった、と言えるのかもしれない。むしろ、中島氏の主意は麻原の教義を正当化することにあるのではなく、現代日本の若者に潜在する超越（または破壊）の欲望の鏡像としてオウム事件を捉えかえすことにある。ジャーナリストティックな情況へ投げられた傾聴すべき一石と考える（氏は現在、四天王寺国際仏教大学教授）。（一九九九年十一月十八日）

（もり・ひろし）フリー編集ライター。一九五三年、神戸市生まれ。編集プロダクション勤務を経て、一九九五年からフリーランス。

■隔月刊オンラインマガジン「カルチャー・レビュー」バックナンバー
(http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/review1.html)を閲覧いただけます

＜01号＞（1998/10/01発行）

◆房主の開口一番／山本繁樹 ◆ドーナツトークは僕なりの解答／田中俊英 ◆コンピュータ・変わる本世界／池田知隆 ◆さようなら1999／富哲世

＜02号＞（1998/12/01発行）

◆前書評がなぜ必要か？／松本功 ◆無店舗の「六畳間書店」／山田利行 ◆あらいと郷愁の街へある東京日記／大橋愛由等 ◆ダイヤル日記「某月某日」／黒マンツのK

＜03号＞（1999/02/01発行）

◆余りの方から割り算されて「性現象論」を読む／加藤正太郎 ◆名付けられなかったもの、なまきものとされたもの、肯定から／おくのなお ◆房主の近況一中年の受難と回復／山本繁樹

＜04号＞（1999/04/01発行）

◆狂言のエッセンスのようなものを／赤坂放笛 ◆映画の人生、人生の映画／堀本和彦 ◆世代の幻想を生きる一神戸空襲を記録する会／富哲世

＜05号＞（1999/06/01発行）

◆石鐘方の裏は海に入る―「論語」の一部から／野原燐 ◆哲学と援助―「今、ここ」を考える／田中俊英 ◆読書会／永井均著（子ども）のための哲学／山本繁樹

＜06号＞（1999/08/01発行）

◆ヴァジラヤーナの封印について―もしくは、宗教の言葉をめぐる疎隔／森ひろし ◆イエスのような男、松下昇のこと／元正章 ◆健康食ブーム／三宅紀子 ◆知の地下水を枯らすな―読者も参加し21世紀の出版を拓け／真島正臣 ◆「ロルカ詩祭」への誘い／大橋愛由等

＜07号＞（1999/10/01発行）

◆考現学・覚書 言葉がひらかれる―栗田隆子 ◆ペーパー版「La Vue」への誘惑／編集部 ◆体験的認識でどのように希望を語るか／宇野正明 ◆おそろしや「脳死」臓器移植／松本康治 ◆「誠実」と「ルサンチマン」という小説／山本繁樹

■編集後記

＊雑誌読みの女人筋は、「あとがき」から読む傾向があるらしい。編集者の表情や呼吸を読みとれる気がするからだろうか。本紙読者のあなたは、如何ですか？ 雑誌ではないが、編集者が読んだ本のある「あとがき」は、実に示唆に富み、かつ言葉の正確な意味で「刺激的」であった。それは、本紙に寄稿していただいた松本功氏の著書「ルネッサンスパブリッシング宣言」のことである。

＊私たちは、言葉の使用を（規範的）に教えられ、またそう学ぶことが「正解」と確信的に考えられてきた。辞書があるから、その象徴的な事例だろう。だから、誤字・脱字はもちろんだこと、漢字の遣い分けや句読点など、編集者や校正者による厳しい統制（規範）を必要かつ重要なことと考え、また受け入れてきた。しかし松本氏によれば、「編集者と校正者は、原稿に混在している錯綜した声の痕跡を奪い取る」とする。（中略）複数の表記が、混ざっている原稿は、ケラの段階で、あたかも一つの考えしかないかのように、編集者と校正者の共同戦線によって統一される。規範化されるわけだ。（中略）しかし、現実の社会には実は規範的な解答がないという文字が溢りしている。そのような時代に、よそよそしいきれいでつぎつぎという文字が活字というものは、むしろ、不誠実なのではないだろうか。（中略）表記法も統一されていらない方がかえってリアルなのではないか？

＊編集者はこの引用をしながら、句読点の位置や漢字に置き換えるべきか否か、校正者の性を感じてしまう。何故だろうか？ それは、かくあるべき校正術の規範に縛られているからだろう。しかしこの規範の内側には、文字表記「エクリチュール」が（声の痕跡）すなわち、話し言葉「パロール」の輝きや息づかいを抑圧、隠蔽し、「文字」という普遍性を専制的に押しつけているというところについては、無自覚になるのだ（確か、J・J・ルソーも、そんなことを言っていたな）。しかし逸脱や、ましてや誤用で、体系としての言語「ラング」を打ち破って新しい発想や表現方法を生み出してきたことを、改めて想記しよう。

＊書きながらも、誤字・脱字などの校正漏れがないかと気懸りな編集者である。（S.Y.）

■本紙への感想・叱咤・激励・投げ銭など、お待ちしております。

■「シャノール・カフェ」グループでは、自費出版から商業出版まで、編集・制作（DTP）・装幀・デザインなどのお手伝いをいたします。ぜひ、一度ご相談ください。

